

昨夜、横浜公園の石舞台で東日本大震災を記憶に留め、犠牲となった方々を追悼し、今なお被災し、避難を余儀なくされている方々と共に、平和で安心できる世界を願って祈り、手をつなぎあうために「追悼の夕べ」に参加してきました。多数の賛同団体や個人の支援がありました。



かなり冷え込む夕方になりましたが、献灯のキャンドルを舞台の裾に次々と並べていきました。この折に、港南台少年少女合唱団が可愛い声を響かせて 3 曲、心を込めて歌いました。その後、横浜港南台教会のコーラス部も、この日のために「ふるさと港南台」というグループを作って、練習を重ねて、

この合唱団と合同して、歌を歌いましたので、それを聞くのも楽しみにして出かけたのです。命、平和、愛の大切さを、やさしい思いを、祈りを込めて歌ってくれました。キャンドルの光が夕闇の中に、小さな温かい輝きを放ってきました。このキャンドルはあの日、巨大津波で流された人々、家々を象徴しています。



いただいたパンフレットによれば、今なお、福島原発の放射能汚染によって、避難、転居している人々が、18万6602人。そのうち神奈川県に4000人近い人々が避難しているということです。政府は年間1ミリシーベルトであった放射線量を20ミリシーベルトまで基準値を上げて、除染、除染、復興、復興という掛け声で、放射能汚染地区に帰還を促し、避難者のための住宅支援は来年3月で打ち切る予定とのこと。けれども除染は限界があり、人の住む「ふるさと」としての復興が進んでいるという話は聞いたことがありません。放射能はいまだに高濃度で残留し、原発の事故の収束もなされず、黒い袋に詰め込まれた放射能汚染廃棄物が山積みされた故郷へ、安心して、希望をもって帰れるでしょうか。

やがて追悼の夕べが始まり、詩の朗読がされました。放射能で殺された虫、草花が黒い袋の中で祟り神となって忍び込み、生き続けるという幻想はまさに現実としか思えませんでした。

避難しておられる方のお話がありました。「絶望して、消えてしまいたい」と思わずにいらなかった気持ち、「悲しみに蓋をしなれば」とひたすら忍耐した思い、「やっと1年単位でものが考えられる」と少し生きている実感を持てるようになった今日この頃だと話されました。前途に希望が見えない、完全に故郷が消えてしまった悲しみ、この喪失感を、私たちはどのように慰められるでしょう。同じ日本人としてどう、生きて行ったらいいでしょうか。いつも、そばにいるよと伝えたい、少しでも思いを寄せたいと願い、祈りました。



この夕べに、チェルノブイリ原発事故のあったウクライナ出身のカテリーナさんがバンドウーラという民族楽器を演奏し、歌を歌ってくれました。彼女自身も原発事故の被災者、避難者です。かなり大きい楽器のバンドウーラを抱えて、とても澄んだ、ハリのある高音を優しく響かせて、ウクライナ民謡、アベ・マリアなど歌ってくれました。その歌声は胸一杯に染みってきました。